心の輪を広げる体験作文　中学生部門　◆優秀賞

「お節介と親切」

神奈川県立相模原中等教育学校　二年　鬼木（おにき）　琥太郎（こたろう）

「チッ。」

いきなり隣から舌打ちが聞こえてきた。

駅のホームで電車を待っていたその時、向こう側から杖を持ったおじいさんが歩いて来た。私はすぐに目の不自由な人だと察して道を開けた。そのおじいさんは何の問題もない様に私の前を通り過ぎていった風に見えたが次の瞬間、舌打ちが聞こえてきた。私は何があったのだろうと思い、舌打ちが聞こえてきた方を見た。すると、先程のおじいさんと人柄の悪そうな男の人がぶつかってしまった様だった。おじいさんは謝っていたが、男の人は何も言わずにおじいさんをにらみつけていた。そして、男の人は立ち去っていった。

「大丈夫でしたか。」

と、私がおじいさんに尋ねると、おじいさんは、

「大丈夫ですよ。声をかけてくれてありがとう。」

と答えてくれた。その後、電車に乗っていつもの様に帰っていたが、その時に私は

「障害者の人ってかわいそうだな。」

と心の中で思っていた。

その数日後、テレビで障害者の人が働いている職場に密着していた番組を観た。最初はあまり興味がなく、流すように観ていたが、途中に出てきたある言葉が私の心を掴んだ。それは、『スティグマ』という言葉である。この言葉は、古代ギリシャで、奴隷や犯罪者を他の人と区別できるようにするために、皮膚に押した焼印が由来である。そして、私の心を動かした意味は、

「社会的に作られた否定的な意味を他者に付与されることです。」

と、解説の人が言っていた。また、

「障害者や病気を持つ人に対して、自分より不自由だから何かをしてあげないと、などと思うことも『スティグマ』の一つです。」

とも言っていた。

私は衝撃を受けた。まさか自分がそんなことをしているなんて、あの時、自分はおじいさんにどう思われていたのだろうか。おじいさんは、

「自分が障害者だから、声をかけてくれたのだろう。」

などと考えていたのだろうか。そんなことを思う度、自分が今まで障害者の人のことをどんな風に考えてきたのかがはっきりと分かってしまった。

この体験を通して、障害者の人に対する自分の気持ちが、

「かわいそうだな、辛いだろうな。」

などといった哀れみの気持ちしかなかったことが分かった。これは、私だけでなく、世の中の様々な人がそうだと思う。だから、障害者の人を必要以上に哀れむべきでなく、かといって何も手助けをしてあげない訳ではない様に上手くバランスを取ることが大切だと思う。障害者の人も人間だから、人生を楽しむ権利がある。だからこそ、私たち全員が人生を楽しく過ごすことができるように、お節介と親切のバランスが大切だ。